

新年のご挨拶

一般社団法人日本病院薬剤師会
会長

木平 健治 Kenji KIHIRA



新年明けましておめでとうございます。会員の皆様方におかれましては、希望に満ちた新年をお迎えることとお慶び申し上げます。また、日頃より日本病院薬剤師会（以下、日病薬）の運営にご理解とご協力を賜り、感謝申し上げます。

今では、薬剤師による処方提案、一般病棟やICU等への薬剤師の配置など、入院患者や外来患者を対象とした薬物療法の管理による有効性と安全性の確保への貢献が高い評価を受けていることを喜ばしく感じているところです。

一方、医薬品や薬剤師に関する話題として、高額医薬品と薬価の改定、抗がん薬の残液の問題、偽薬の問題、使用に注意を要する医薬品の取り扱いの問題、処方せんの付け替えの問題、医薬品に関する事故など、課題の多い一年であったかと思えます。取り分け、敷地内薬局の問題は、今後の薬剤師にとっても重要な課題をはらんでおり、対応について考えていきたいと思っているところです。

さて、今年は、いよいよ地域医療計画に従って医療改革が本格化するものと思われれます。医療機能の分化と地域包括ケアシステムが進むなかで最も必要とされているのは、薬剤師－薬剤師間の情報の共有であり、また、他職種との連携と思われれます。そこで事業計画においても重点事項の1つとして「医療連携」を挙げております。

もちろん、薬剤師として薬物療法に責任をもち、その効果や副作用の評価を行い、処方設計などの職責を十分に果たし、その存在感を示すためには、入院医療において病棟活動を一層充実させることが重要です。また、医療機能分化による医療機関同士の連携、地域医療完結型医療へと進むなか、かかりつけ薬局との連携などの医療連携が不可欠となるものと思われれます。そのためには、入院患者のみならず外来患者への対応の充実も必要となっています。医療連携による、シームレスな薬物療法の管理により、安心して安全な医療および介護にも貢献することができるものと思われれます。さらには、地域連携に関する会議等にも積極的に参加し、地域医療において必要とされる情報を効率良く伝達することにより、薬剤師が医療機関と地域を結ぶ連携の要となる新しいステージに立つことが可能となります。

今後、電子化の時代を迎え、ビッグデータの利活用が可能となってきます。我々の日々の活動の記録、すなわち薬物療法の有効性の評価や副作用の予防・発見・対応が、医薬品の適正使用のためのデータとして活かされることになり、それは薬の専門職としての薬剤師の有用性を示す絶好のチャンスとなると思われます。様々な場面で、皆様と共に日病薬として組織を挙げて次代を切り開いていきたいと思っております。

新年にあたり、会員の皆様の一層のご支援を改めてお願い申し上げます。また、皆様のさらなるご活躍とご健勝を祈念申し上げます。